生徒の開発した鯖缶が国際宇宙飛行士を支えています

福井県立若狭高等学校　教諭　小坂 康之

子どもたちは、いつでも前を向いてキラキラと輝いています。本当に素晴らしい可能性があります。でも、弱くて危うい部分もあります。そんな子どもたちがどう成長するかは、大人たちのつくる環境や接し方次第なのだと思います。子どもたちが感じている「すごい！」「面白い」「嬉しい」という感情を大切に、興味・関心や主体性に結び付けていく、この仕事が私は大好きです。

すでにスイッチが入っている生徒もいるし、そうでない場合もあります。自信がなくて一歩踏み出せない、好きなことが見つからない、これは大人にも言えるかもしれません。

宇宙「鯖缶」開発までの１４年の過程では、生徒や開発に関わった人々の喜びや感動だけでなく、苦労や苦悶がありました。しかし、今振り返ると、問いや意見を積み重なる“対話”によって人々のスイッチが入り、変容したことを感じています。“対話”は、ただ話を聞くこととも違います。意見を聞き、その意見にたくさんの方がたの問いを重ね、自分の意見も重ねていく。多数決とも違います。少数派の意見も１つの意見として取り上げ、みんなで作り上げていく方法です。システムの中で機械的に活動する少し前の時代ならば、“対話”は必要なかったかもしれません。しかし、変化の大きな現代に、新しいクリエイティブな解を求めていくには“対話”が重要ツールとなります。人の数だけスイッチも多様です。たくさんの考え方、価値観があり、一人として同じ人はいません。この素晴らしくも複雑である多様性のあるスイッチを入れるには、やはりそれを理解できる多様な先生たちが必要です。画一的な決定や運営ではなく、それぞれを認めた社会を創る。これがまさに“幸せ”ではないでしょうか。いろんな子ども、お母さんやお父さん、地域のおじさんやおばさん、そして先生がいて良いのです。“宇宙日本食鯖缶”開発の過程には、みなさんの“幸せ”に結びつくヒントがあったのかもしれません。ぜひ、福井県でともに幸せを創りませんか。